



巻 頭 言

公立大学法人 名桜大学

学長 瀬名波 榮 喜

1994年に開学した本学が他に先駆けて最初に設置した付属施設は、1996年に開設された総合研究所であった。それは大学の使命である研究を促進するとともに、その成果を地域社会に還元し、地域社会の活性化と発展に貢献するためである。爾来研究所は、その趣旨を踏まえ、知の生産と普及事業により地域社会に多大な貢献をしてきたことは高く評価されなければならない。

しかし、2013年4月エクステンションセンターの設置にともない、研究所が創立以来実施してきた公開講座や出前講座は、エクステンションセンターに引き継がれることになり、研究所はその本来の使命である研究機関として位置づけられることになった。したがって、2013年度は、学術的なシンポジウムや研究発表が盛んに行われた。そのテーマも地域的なものから国際的なものにおよび、学術的に大きな成果を上げてきた。特筆すべきは、今回広く沖縄県やヤンバル地域の課題を論じた研究がかなり増えたということである。本学が地域の課題を解決するために誕生したことを考えれば、本学の存在価値を評価せずにはおれない。

このような成果を発揮できた背景には、金城やす子研究所長のたゆまざる努力があったからである。なかんずく科学研究費に関する説明会を開催するなどして、教員の研究意欲の高揚に大きな役割を果たした。全教員のおよそ40パーセントが科研費を申請し、その内8パーセント以上が採択された。来年度はさらにそのパーセントを高めてくれるであろうと期待できる。本学で配分される研究費が限られているだけに、研究者として外部資金に頼らざるを得ない現状を認識すべきである。

私は、ヤンバルには研究テーマはあちこちにいくらでもころがっている、とたびたび語ってきた。それらは語学・人文科学・社会科学・自然科学の各分野に及んでおり、研究者のメスを待っている。例えば、琉球最高の歌人恩納ナベもヤンバルの人であり、またヤンバルクイナの生態もまだ明らかになっていないという。もちろん地域研究は、科学的にはその地域のみ適用されるのではなく、学界において広く認められるものでなくてはならない。沖縄という地域に誕生した組踊が世界遺産に指定されたのは、言うまでもなくそのユニバーサルな価値が認められたからであろう。

本学は、今年開学20周年を迎える。また、今年学校法人名護総合学園から公立大学法人化して5年目に入る。これを転機に研究所が、一層の研究成果を上げ、地域の活性化のみならず、知の生産の拠点として広く学界に貢献されんことを切に望むものである。